

知っておきたい！骨粗しょう症

山陰中央新報 連載コラム バックナンバー ④

2020年8月31日掲載：検査について

「骨粗しょう症かどうか、一度、調べてほしいわ。」と思っても、なんとなく受診しそびれていませんか。今回は、どんな検査をしてどのように評価、診断するのかをお伝えします。

骨強度（骨の強さ）は、骨密度（骨量）と骨質に分けて考えます。骨密度が骨強度の7割を占め、その他骨質が3割を占めると言われています。骨密度は若い人と比べて何%かで評価出来ますが、骨質については現状、数値化することができていません。そのため骨密度とは別に、今までの骨折歴、家族の骨折歴、あるいは今後骨折する確率、その他合併症などの問診で、総合的に評価することが重要となります。

骨密度測定の方法はいろいろあります。手のレントゲン写真から分析する「MD（エムディー）法」や、かかとの骨に超音波をあてる「超音波測定法」は、比較的簡便で、骨密度検診をはじめ、多くの医療機関で行われています。

ただし最も正確な骨密度が分かる方法は、「DXA（デキサ）法」で、主に病院に設置してあります。DXA法は、検査台に仰向けになり、エックス線を背骨（腰椎）や足の付け根（大腿骨）にあてます。検査は10分程度、もちろん痛みもありません。『骨密度の低さ』は診断の重要なポイントとなります。

ですがさきほど述べたように、骨密度だけでは診断ができない場合があり、問診で患者さんに基本的な情報をお聞きすることも大切です。

痛いところはないか、歩行や生活動作に不自由がないか、最近転んだことはないか、治療中の病気や服薬がないか、食事の状況はどうか、といった情報が、骨粗しょう症との関連や今後の治療方針を考える鍵になるのです。

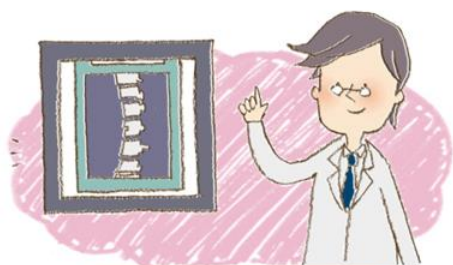
その中でも特に骨折歴の把握が重要で、検査としてよく背骨のレントゲンを撮影します。理由は“いつのまにか骨折”と呼ばれる、激痛でもないのに骨が折れたり、潰れたりすることがあり、その好発部位の胸腰椎(腰骨)で骨折を確認できるからです。

そして、血液検査では、骨の新陳代謝の状況を確認できます。骨が壊れると数値が高くなる「骨吸収マーカー」と、骨が作られると高くなる「骨形成マーカー」のバランスから、骨粗しょう症の進行具合がわかります。また、骨の原料となるカルシウムやビタミンD、ビタミンKなどが不足していないか、あるいはその他合併症を調べます。

こうして、骨密度、骨折歴（レントゲン）、採血などから総合的に、骨粗しょう症を評価、診断していくのです。「ほんなら、ちょっとし、行ってみーわ。」と思われれば、お気軽にお近くの整形外科など医療機関を受診してみてください。

骨粗しょう症の検査

骨粗しょう症の検査方法



X線(レントゲン)検査



骨密度測定



血液・尿検査

骨粗しょう症の検査

骨密度測定検査



骨密度測定検査

【DXA (デキサ) 法】



米国ホロジック社製 骨密度測定装置 **HORIZON**